

研究テーマ	作者の表現意図や思いを実感として捉え、主体的に取り組む鑑賞活動の在り方 －第2学年「絵画の世界へアプローチ！」の実践を通して－
-------	--

大洗町立南中学校 教諭 森江 邦和

I 研究テーマについて

中学校学習指導要領解説美術編（平成20年9月文部科学省）「B鑑賞」の内容には、「鑑賞は単に知識や作品の定まった価値を学ぶだけの学習ではなく、知識なども活用しながら、様々な視点で思いを巡らせ、自分の中に新しい価値をつくり出す学習である」と記されており、近年、美術の授業でも、作品カードを使用したアートゲームや対話型鑑賞などが取り上げられるようになってきた。このような活動で大切なことは「何が描かれているのか」「なぜそう思ったのか」だけで終わらないことである。尾形光琳の「紅白梅図屏風」を例に挙げるならば、「紅白の梅は写実的な表現なのに対し、S字に流れる川や渦巻きの水面は図案化されデザイン的な表現になっている」のように、造形的なよさを見付けたり、作者の表現意図や心情を作品の中から読み取ったりするような学びをつくりだしていく必要がある。また、思春期にある中学生は、批判的にものを見たり、自分の中で価値を再構築したりしていく時期でもある。このような時期に、美術の表現や鑑賞の学習を通して自分をしっかりと見つめたり、よいもの美しいものにしっかりと触れ、自分なりの価値観を形成したりしていくことは、美術の授業づくりを考えていくうえでとても大切なことである。そこで、本研究では、これまでの作品から感じ取ることが中心の鑑賞活動を発展させ、生徒が自分から作品へ関わっていくような活動を行うことで、より主体性を育み、作者の思いに迫ることができるのではないかと考えた。

II 研究の実際

1 題材名 第2学年「絵画の世界へアプローチ！」(鑑賞)

2 題材の目標

- 美術作品に関心を持ち、主体的に見方や感じ方を深めることができる。(美術への関心・意欲・態度)
- 様々な方法で課題解決しながら、造形的なよさや美しさ、作者の意図などを感じ取り、作品の世界に迫ることができる。(鑑賞の能力)

3 題材について

(1) 生徒の実態

第2学年2組の生徒(27人)の実態は、真面目で表現活動や鑑賞活動にも熱心に取り組んでいる。7月に行ったアンケートでは、「作品を見て、そのよさや美しさ、作者の考えなどを感じ取ることができた。」と回答した生徒は10人であった。「作品と向かい合い感じたことや気付いたことなどについて意見交換をし、理解や見方を深めることができるようになった。」と回答した生徒は8人であった。これらの結果から、生徒たちは興味関心をもって活動に取り組んでいるが、自分なりの意見をもつことが苦手だったり、自分が感じ取ったことについて自信がもてなかったりする生徒が多いことが分かった。また、意見交換を通して新しい視点に気付くような経験も不足しているようであり、本校の研究主題である「思考力・実践力・表現力の育成」を目指すためにも、自分なりの見方や考え方を深められるような学習を行い、今後の学習で生かせるように指導していきたい。

(2) 題材観

本時は、食育と関連させた授業の一環として実施することから、食に関係する作品を取り上げた。美術作品の中には、食物や食事の風景などをモチーフとして描いた作品が多く存在する。それらの作品は、制作された当時の生活の様子や描かれた人物の心情などがより身近に感じられるため、生徒に提示する題材としても適していると考えた。

(3) 指導観

本研究では、作品から感じ取ることだけではなく、自分たちの側からも、積極的に作品と関わるような鑑賞活動を試みる。これまでの鑑賞の授業は、作品から感じ取ったことを中心に話し合いを行い、作品の見方や考え方を深めようとしていた。しかし、作品から感じ取ったことを言語活動だけで深めていこうとすると個々の経験や語彙力に差があり、言語活動が苦手な生徒は作品の見方や考え方が深まらない傾向にあった。そもそも美術作品の中には、言葉では表現しにくいからこそ、作品として生み出されたものも多いことはいままでもない。作品そのものが作者の言葉として存在しているのであるから、作品と向かい合う鑑賞という活動は、感じ取ったイメージや価値を自分なりの言葉で再構築するだけでなく、さらに作品の方へ歩み寄り、作品の中に入り込んで作品を全身で感じるようなことも必要ではないかと考えた。そこで、対話形式の鑑賞活動後に、意見交換を通して新たに感じたことや気付いたこと、抱いた疑問などを、実際に疑似体験したり、実証したりする学習を展開し、言語活動だけでは分かりにくかった作者の表現意図や思いを実感として捉えることで、より自分なりの見方や考え方を深められるであろうと考えた。このように、鑑賞者と作品がそれぞれに働きかけ、互いに関わり合う学習を通して、さらなる思考力・実践力・表現力の育成へとつなげていきたい。

4 題材の評価基準

関心・意欲・態度	鑑賞の能力
・作品から感じ取ったことや抱いた疑問などについて、積極的に意見交換をしたり、実証したりしようとする。	・グループごとに設定したテーマをもとに話し合いながら課題解決し、表現の工夫や造形的なよさや美しさに気付くことができる。

5 題材の指導計画（4時間扱い）

時間	学習課題・活動	評価規準
第1次 ①	作品との出会い ～よさや美しさを味わおう～ ・学習の流れを知る。 ・提示された作品を鑑賞し、感じたことや気付いたことなど自分の言葉で書き出す。 ・興味をもった作品ごとに課題解決グループをつくり、自分の意見や感想、疑問などを発表し合う。 ・次時の課題解決のテーマになりそうな話題を書き出す。	関 鑑賞に関心をもち、意欲的に活動している。 【観察】
第2次 ①	作者の思いに触れよう。 ・選んだ作品や作者について、画集やインターネットを利用し、制作された時代背景や作品の特徴などを調べる。 ・課題解決グループごとに、作品の表現上の工夫や自分たちが抱いた疑問などをもとに、追求してみたいテーマを決める。 ・グループごとに検証方法の計画を立てる。	鑑 美術作品の表現の特徴や表現の工夫を感じ取り、理解している。 【観察・ワークシート】
第3次 ①	絵画の世界にアプローチ！（グループで学習） ・グループごとに設定したテーマに合わせ、疑似体験したり、構図を再現してみたりと、様々な方法で作品の世界に迫る。 ・グループのメンバーと意見交換をしながら、テーマについて試行錯誤を重ねる。 ・活動の中から、気付いたことや改めて感じたことなどをまとめる。	鑑 美術作品の表現の工夫や作者の意図、造形的なよさを感じ取り、様々な方法で作品の世界に迫ることができる。 【観察・ワークシート】
第4次 ①	絵画の世界へようこそ ～私が注目したこの一点～ ・自分を取り上げた作品について、友達に紹介したり、学習の成果をまとめたりする。	関 グループで検証した結果を自分の言葉でまとめようとしている。 【観察・ワークシート】

<本時の指導>

(1) 目標

- グループごとに設定したテーマをもとに、様々な方法（疑似体験や構図の再現など）を用いて、話し合いながら課題解決し、表現の工夫や造形的なよさや美しさに気付くことができる。

(2) 準備・資料

教師…複製画・図版・イーゼル・マグネット・額縁・静物・デジカメ・色画用紙・静物模型
 生徒…ワークシート・筆記用具・絵の具

(3) 展開

学習活動（予想される生徒の姿）・内容	教師の働きかけと評価
<p>1 本時の学習活動の流れについて知る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>作品に込められた作者の思いや制作意図を探ってみよう。</p> </div> <p>(1) 本時の学習課題を確認する。 (2) 作者について調べた内容を振り返る。 ○ どうしてこのような作品をつくったのだろうか？ ○ 何を表現したかったのだろうか？</p> <p>2 取り上げる作品と各グループのテーマを確認する。 <予想される活動例></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 構図や固有色を再現する。(セザンヌ) ・ 別のもので、人物の顔を制作してみる。(アルチンボルド) ・ 作品の周囲の様子を想像して描いてみる。(フェルメール) ・ 光の当たり方を参考に模写してみる。(フェルメール) ・ 青と黄の色遣いと別の色遣いから受ける印象の違いを試す。(ゴッホ) ・ 同じような写真を撮り、作品と比較して違いを考える。(上田薫) <p>○ ホール・セザンヌ 「果物籠のある静物」</p>  <p>○ ジェズペ・アルチンボルド 「四季」(夏)</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本時の学習課題を確認するとともに、作品を取り上げながら、これまでの鑑賞活動を振り返り、生徒の意識を高めておく。 ・ 美術作品の中には、食べ物や食事の風景など、食に関するものが多く描かれていることを確認する。 ・ グループでの課題解決活動に入る前に、作者がどんな時代に生きていたかなど調べた内容を振り返らせる。 ・ 生徒が抱いた「何でこの色だったのかな」「この部分だけ光が当たっているのだろうか」などの疑問を教師が取り上げていくことで、感じたことを自然に出せる雰囲気づくりをする。 ・ それぞれの作品の特徴やよさについて、生徒の見方や感じ方を大切にしながら助言していく。 ・ 課題解決の場面では、あえて「本当に、この構図が一番いいのかな」「どうしてこの色を使ったのかな、他の色でもよかったのではないか」のような質問を生徒にぶつけることで、試行錯誤する場面をつくり、活動が深まるように支援する。 ・ グループでの活動であることを踏まえ、自分の考えにこだわらず、他者との意見交換を積極的に行い、自分では気付かなかった視点や考えを取り入れるように助言する。 ・ 図録や関連図書を設置し、活動の中で生じた疑問などをすぐに調べられるようにする。

○ヨハネス・フェルメール
「牛乳を注ぐ女」



○ウィンセント・ファン・ゴッホ
「夜のカフェテラス」



○上田薫「ジェリーにスプーンC」
※教科書／美術2・3上 光村図書より

- 3 テーマに合わせ、課題解決活動を行う。
 - (1) グループごとに設定したテーマに合わせ、登場人物の台詞を考えたり、構図を再現してみたりと、様々な方法で作品の世界に迫る。
 - (2) グループのメンバーと意見交換をしながら、テーマについて試行錯誤を重ねる。
 - (3) 活動を通して、気付いたことや改めて感じたことなどをまとめ、発表する。
- 4 本時の学習を振り返り、自分の考えや思いをワークシートにまとめ、発表する。

【評価】(鑑賞の能力)

美術作品の表現の工夫や作者の意図、造形的なよさを感じ取り、様々な方法で作品の世界に迫ることができる。

(観察・ワークシート)

【努力を要する生徒への働きかけ】

活動が滞っている生徒には、事前の調べ習の内容を振り返らせ、作者の行った表の工夫などに注目するよう具体的にアドバイスする。

【十分に満足できる状況例】

取り上げた作品について、グループ学習の中で話し合いをしながら、作者の表現意図や工夫について、そのよさや美しさを感じ取り、自分なりの根拠をもって考えをまとめることができる。

- ・同じ作品でも、違った方法で作品に迫るグループがあってよいことを助言し、グループ間での意見交換も積極的に行わせる。
- ・活動が深まらないグループには、作品に合わせた表現の工夫点や鑑賞活動の例を示したり、他のグループの活動を参考にするように支援する。
- ・互いに体験したことをグループごとに発表し、共有する時間を確保し、作者の表現意図などについて考えさせる。
- ・次時では、学習の成果をポスター形式にまとめ、作品について友達に紹介することを伝える。

6 指導の実際

(1) 「疑問」から「新たな課題」へ

まずは、作品とじっくり向き合う時間を設ける。5つの作品をそれぞれ鑑賞し、1つの付箋に1つの感想や疑問などを書き出していく。この活動で大切にすることは、作品の造形的よさなどだけでなく、感じた疑問なども素直に書き出すことである。どんな有名な作品であっても、作品の感じ方や捉え方は人それぞれであることを伝え、疑問に感じたことや批判的に捉えた意見なども付箋に書かせていった。鑑賞活動では、自分の意見をもつことに抵抗を感じてしまうことが活発な話し合いを滞らせてしまう原因になるので、それも個々の大切な言葉として受け止めるように日頃から助言し、今回も次の課題へと進むきっかけとしていった。ただし、どんな作品にも、それぞれ必ずよいところがあることを生徒には伝えておく必要がある。自分の気に入った作品であろうが、嫌いな作品であろうが、認められるべき価値は必ずあるからである。有名な作家の作品でも、子どもが作った作品でも同じことである。すべては、そこにどんな価値を見い出していくのかが鑑賞活動の

おもしろいところである。



感想を話し合いながら、分類する。



見出しを付け、疑問やキーワードを書き出す。
ここから、次の活動のテーマを決めていく。

<活動の流れ>

- ① 5つの作品を鑑賞し、付箋に感想を書く。
 - ② 「一番気になった作品」ごとに集まり、グループを作る。
 - ③ 付箋に書かれた内容を共通点やキーワードをもとに分類し、見出しを付ける。
 - ④ まとめたものを見ながら、グループごとに活動のテーマを見つける。
- ※ 1つの作品でも、疑問が違えば、次時の活動のテーマが異なる。

(例) ポール・セザンヌの「果物籠のある静物」の場合

疑問 1
「なんか、この絵変な感じがする。」
「なぜ、フルーツが落ちないのか？」

次時の活動 1

- こんな構図があり得るのか、実際に静物を置いてみよう。



疑問 2
「本物のオレンジや洋なしにこんな色が使われているのか？」

次時の活動 2

- こんな色を使って、本物の果物に見えるのか、セザンヌの色を作って描いてみよう。



(2) 自分から作品へ関わるということ

これまでの鑑賞活動は、作品から受ける印象や雰囲気などから感じてイメージを言語化し、共有するという活動が多かった。しかし、これまでの活動では、生徒が作品や作家について、興味を抱いたものの、それ以上授業で取り上げることはなく、深まりに欠けるような気がしていた。

そこで、今回の授業では、作品からではなく、自分からもっと作品に関わり、作者の表現方法や制作意図などを疑似体験したり、実証したりしていくことで、さらに鑑賞活動が深まるのではないかと考え、実施した提案的な活動である。また、生徒の活動に幅を持たせ、一つの作品に対しても多角的に迫れるようにした。



アルチンボルドは、なんで野菜を使ったんだろう？



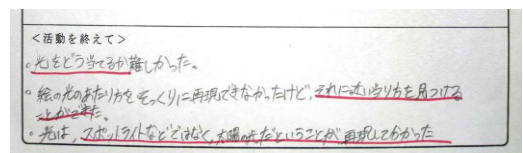
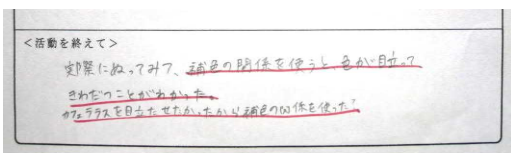
こんな色を入れると写真みたいな色になるんだ！



どうして、ゴッホは青と黄色の補色にしたんだろう？他にもあの絵に合う色があるかもしれない。



フェルメールの光は、スポットライトではないようだな…。



III 研究の成果と課題

今回の活動では、一番気になった作品ごとにグループを作ったことと、感想や疑問などを付箋に書き、模造紙にまとめていったことで、作品に対するいろいろな意見やテーマの方向性が視覚的に確認しやすくなり、話し合い活動がこれまで以上に活発に行われた。そのため、疑似体験や実証の仕方も多様性が生まれ、一つの作品について、様々な角度から迫ることができた。特に、これまで鑑賞活動に積極的でなかった生徒も表情豊かに生き生きと活動していたことが印象的だった。また、作者や作品について、その時代背景や作者の言葉なども調べてから、体験的な活動に取り組んだことも、作品や作者に対する理解が深まった一因だと思う。生徒の中には、他の友人に対してまるで学芸員のように自分が取り組んだ作品について説明をしている姿も見られた。課題としては、活動が多様化したことで準備物が多くなってしまい、ものの管理に苦労した。また、作家の表現意図までは、迫ることができなかった生徒もいるので、そのような生徒に対しても新たな手立てを考えていく必要があると感じた。そして、授業時間数が限られている中で、4時間という時間数を確保していく難しさも感じた。

今回の研究を通して、豊かな感性や創造する力を養うためにも、体験的で、自分から積極的に作品へ迫っていくような活動は効果的だと実感することができた。今後もこのような自分から作品に対して関わっていくような鑑賞活動の研究を進めていきたい。

